

『金融資本論』を読んで

写真のヒルファディング『金融資本論』を5回に分けて、宮本憲一先生と仲間たちと読んだ。何回読んでも難解な古典であり、読み始めると睡魔に襲われることが多かった。研究会でも、「ひる」に読んでも、ふぁーとしてくると、恥ずかしげもなく言ったものだ。こうして上下2冊を読み切ると、なんだか達成感のようなものを感じる。せっかくなので感想めいたことを記しておきたい。

目次は第一編 貨幣と信用、第二編 資本の可動化
擬制資本、第三編 金融資本と自由競争の制限、第四編
金融資本と恐慌、第五編 金融資本の経済政策。各編を

研究会ごとに、メンバーが報告して議論してきた。1月から始まり、6月に福島第一原発調査、7月に西淀川調査、9月には台風が襲来して、10月13日に第五編まで読了。

目次のように、「貨幣と信用」に始まり「金融資本の経済政策」に至る、抽象的な次元から具体的な政策展開まで、じつに幅広い内容である。マルクス『資本論』、レーニンの『帝国主義論』、資本主義や帝国主義の定義、金融資本の政治経済的な評価に関わる。それだけに多くの論争、批判にさらされてきた。現代に引き継がれる、経済学の古典と言える。なお、私は写真の岩波書店版、宮本先生らは大月書店版の訳本を利用した。訳者によって、かなり訳やニュアンスが違うことが明らかとなった。どちらかと言うと、岩波版の訳はより難解のようだった。

『金融資本論』は大学院入試のドイツ語「対策」のために、ドイツ語版をコピーして読んだことがある。当然ながら、訳本と対比しながら。ドイツ語の理解に役立ったが、内容的にはほとんど理解できなかった。今回40数年ぶりに手に取り、とにかく全体を読み終えて、『金融資本論』の論点などをすこし理解できるようになった。研究会前に、難解な文章を何回も読み、メンバーによる詳細な報告、そして宮本先生らしいコメントを聞いてきたからだ。

私は報告しなかったが、「研究会メモ」なるものを準備して、議論の材料を提供してきた。『金融資本論』と宮本先生の『社会資本論』『現代資本主義と国家』、金融資本の定義をめぐって、恐慌と現代資本主義などだ。第三編さいごの「社会経済の組織の問題は金融資本そのものの発展によってますますより良く解決される」という指摘は、ヒルファディングの「組織された資本主義」を意味するものでないか、などと指摘した。

宮本先生は第五編さいごの指摘に注目する必要があると。「金融資本は、社会的生産にたいする支配権を、ますます、少数の最大の資本結合体の手に握らせる。それは、生産の指揮を所有から分離し、生産を、資本主義の内部で到達しうる限界まで、社会化する。」宮本先生の隣に座って先生のコメントを聞いたが、やはり鋭く、学ぶことが多い。

(2018年10月15日)

